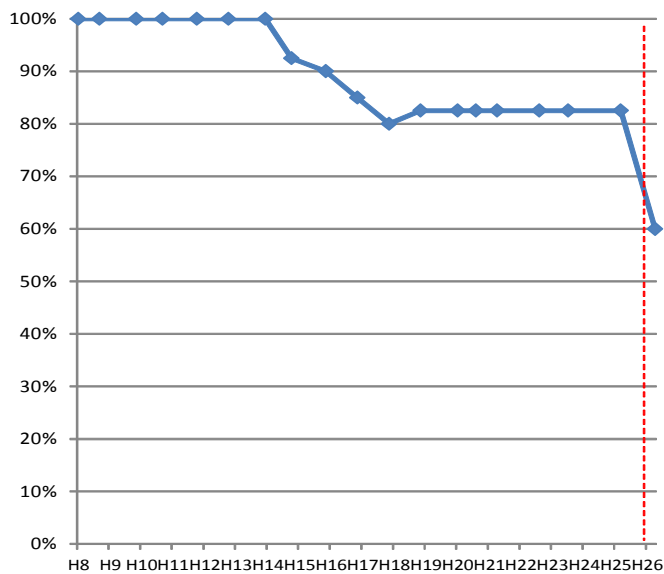


樹種名	ブナ（別名：シロブナ）	
科 目	ブナ科	
学 名	<i>Fagus crenata</i>	
分 布	北海道南西部にある渡島半島以南から本州、四国、九州の山地に分布する。	
樹木特性	陰樹であり、温帯林の肥沃な土地で優占種として大群落を形成する。 萌芽は個体サイズが小さいときは萌芽能力をもっているが、成長するにつれしだいに弱まる。	
用 途	建築・器具・船舶材、盆栽にも利用。	
植栽本数/面積 （植栽密度）	300 本／0.06ha (5,000 本／ha)	
特 徴	【樹 形】 ブナ（山毛櫨、櫨、栲、栢、）は、落葉広葉樹で、温帯性落葉広葉樹林の主要構成種。大きいものは高さ 30m にも達するものがある。 樹皮は灰白色できめが細かく、よく地衣類などが着いて、独特の模様のように見える。葉は楕円形で、薄くてやや固め、縁は波打っている。雌雄同株で、花は春に咲き、雄花は枝先からぶら下がった柄の先に数個着いて、全体としては房状になる。雌花は枝先からしっかりした柄の先につく。果実は総苞片に包まれてその年の秋に成熟し、それが割れて散布される。 堅果は柄が短く、赤褐色で 10 月から 11 月に熟す。熟すと殻斗が 4 裂し、3 稜のある卵形の種子が、2 個出でくる。	   
試験地での様子	試験地設定当時は森林の多様性への期待が高まっていたことから、ブナの適地ではないが見本林として植栽した。 ポット苗を植栽し、植栽後にコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生し、植栽された樹種の中では特に被害が大きかったが枯死には至らず、選定した調査木の現存率は 60 %と比較的高い結果となった。また、成長量が小さいことから、下刈作業に多くの労力を要した。	
被 害	植栽後にコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。植栽された樹種の中では最も被害が大きかった。（延べ駆除本数 コウモリガ：9 本、カミキリムシ類：336 本）	

ブナ 現存率



【現存率】

植栽後、6 年を経過した頃より、コウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。

平成 20 年度以降の枯死は見られない。

林内の照度調整を図るため平成 24 年度に本数調整伐を実施した。

本数調整伐を実施した以外の調査木の現存率は 84 % (H 25.6 時点) である。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 60.0%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

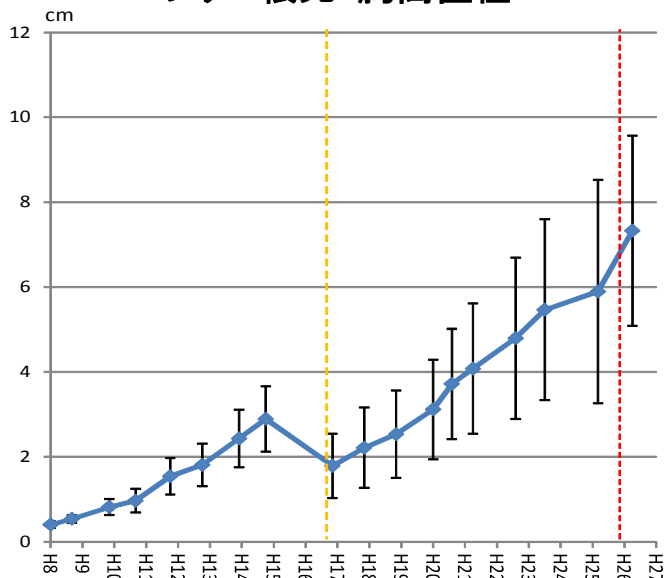
順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 7.33 cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

ブナ 根元・胸高直径



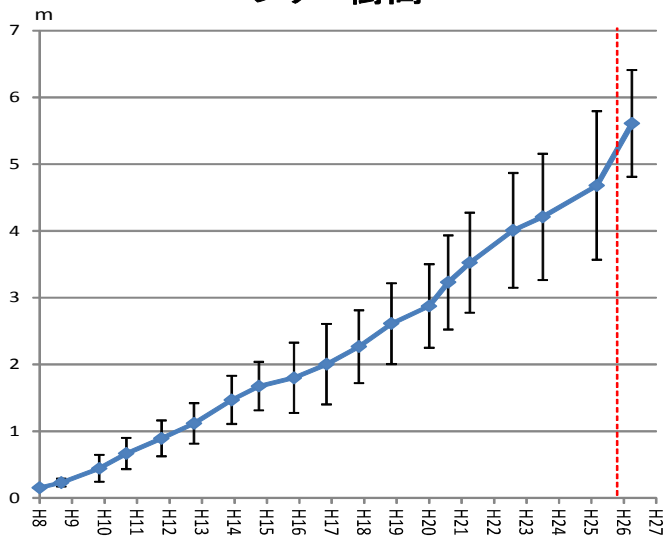
【樹 高】

順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 5.61m であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

ブナ 樹高



《プチ情報》

材は腐りやすい上に加工後に曲がって狂いやすい性質があり、20 世紀まで用材としては好まれなかった。平安時代後期から鎌倉・室町時代にかけては、漆器の椀・皿の普及品の材料として欠かせないものであった。

ブナは成長するにしたがって、根から毒素を出していく。そのため、一定の範囲に一番元気なブナだけが残し、残りのブナは衰弱して枯れてしまう。ところが、一定の範囲に 2 本のブナが双子のように生えている場合がある。これは、一つの実の中に 2 つある同一の遺伝子を持った種から成長したブナである。

世界遺産に登録された白神山地のブナ林は、まとまった天然林としては最後に残ったところである。太平洋側に降りると純林はあまり見られず、ミズナラなど他樹種との混交林をつくる。

南限のブナ林は鹿児島県高隈山にある。